

## ホッチキスの歴史

### ◆ホッチキス名称の由来

「ホッチキス」といえば紙を綴じるもの、国語辞典にも載っていて誰もが知っている文房具ですね。ところが外国に行きホッチキスといっても、さっぱり意味が通じない不思議な道具なのです。それでは、なぜ日本でホッチキスと呼ぶようになったのかご説明しましょう。

日本で初めてホッチキスを販売したのは伊藤喜商店（現イトーキ）で、明治36年ことです。このホッチキスはアメリカ製で、ボディに大きくHOTCHKISS No・1と刻印されていました。この製品はE・H・HOTCHKISS社製で、ブランドと形式を刻印表示したものでした。特に呼び名が無かった時代のこと、誰とはなしにホッチキスというようになったと思われます。

この製品にはHOTCHKISS PAPER FASTNERの文字も読み取れます。当時はペーパーファスナーがアメリカでは一般名称だったのかもしれませんが。

日本では大正時代の特許公報に、紙綴器やホッチキスの表記が見られます。現在、英語圏ではホッチキスをSTAPLERといっています。



当時のアメリカ製ホッチキス（複製）

### ◆ホッチキスの発明者は誰？

手元にある昭和53年発行の資料に、ホッチキスは機関銃の発明者であるベンジャミン・B・ホッチキス（1825-1885）によって発明されたとあります。機関銃とホッチキスでは余りにも隔たりがあるようですが、マシンガンの弾送り機構にヒントを得て、ホッチキスの針送り装置が考案されたと記されています。

平成元年、日本テレビ（謎学の旅）が、ホッチキスの発明者を明らかにするため、ベンジャミン・B・ホッチキスの出身地である米国コネチカット州を訪ねました。

現地の方の話によると、驚くことに、弾送りと針送りの機構がバネをもとに考えられている点で、まったく同じとのこと……。やはり彼が生みの親か？と、取材スタッフは色めき立ったのですが、残念ながら文献などによる証明はできませんでした。



Benjamin Berkley Hotchkiss  
ベンジャミン・B・ホッチキス

また平成六年になり、フジテレビ（なるほど・ザ・ワールド）ではホッチキスの発明者は別におり、ベンジャミン・B・ホッチキスは機関銃の発明者で、弟のエーライ・H・ホッチキスがE・H・ホッチキス社を興したと紹介されました。

ホッチキスの発明者は、依然霧の中ですが、ともかくE・H・ホッチキス社はコネチカット州にあったということですから、ホッチキスの故郷は米国コネチカット州ということになるのでしょうか。

## ◆日本のホッチキスの歴史

日本人によるホッチキスの発明は、特許公報によると明治45年「自働紙綴器」発明者は垣内清八氏、大正元年「A式綴紙器」発明者は天野修一氏らが最初。「自働紙綴器」はかなり大型のようですが、「A式綴紙器」はホッチキス社製の物とよく似ています。

大正3～4年には、アメリカ製のアクメ（1号ホッチキス）が輸入され、このころ針は鉄板をプレスしたムカデ形（アクメ針）でした。大正7年になると伊藤喜商店〈ハト印〉、堀井謄写堂〈コスモス印〉が国内で生産されるようになりました。

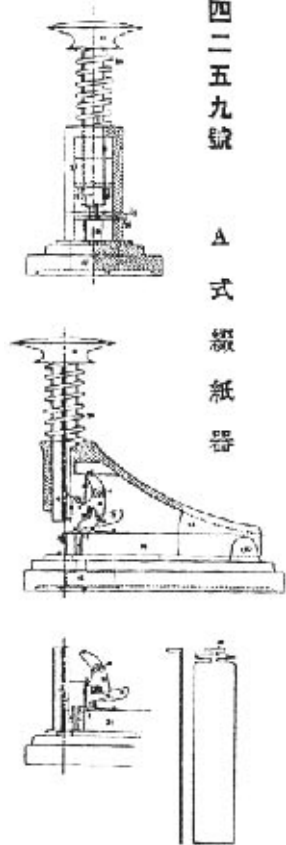
大正15年にはそれまでの鋳物製とは違い、プレス加工のジョイント（2号）が雨森文永堂から発売。その後1年程で、ドイツから3号の綴針が輸入され、昭和3年に3号針を使用するスマート3号がつくられました。

昭和10年頃には、向野事務器製作所（東京都大田区）の向野光雄社長は2号・3号・9号ホッチキスを設計し、製造していました。当時、スマートと言った場合3号をさし、ジョイントは2号、ホルダーは9号（昭和9年発売）がそれぞれホッチキスの呼称でした。戦時中は、9号ホッチキスのみ軍服の補修用として軍より認められ、生産されていたとのことです。

昭和21年に山田興業(株)（現マックス(株)）が、3号ホッチキスの生産を開始したことにより、戦後のホッチキスが始まりました。

特許第二四二五九號

A式綴紙器



堀井謄写堂〈コスモス印〉



ホルダー9号（ただし昭和26年の製品）

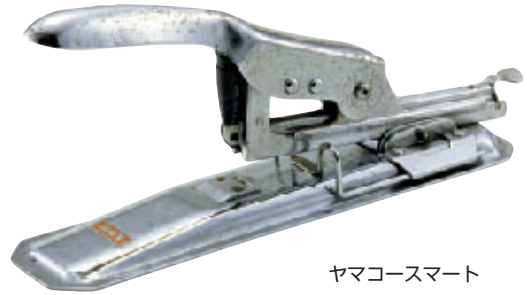
## ◆マックスホッチキスの歴史

### 1. ホッチキスとの出会い

マックス(株)は、創業時に山田航空工業(株)と称し、零式戦闘機の尾翼部品メーカーとして昭和17年に発足しました。戦後、新発足にあたり山田興業(株)と社名を改め、「平和産業に徹し、文化に貢献する」を掲げて、向野氏からホッチキスの製造技術を引継ぎ、終戦から半年後の昭和21年には早くも「ヤマコースマート」(3号ホッチキス)の生産を開始しました。

まもなく1号・2号・5号・9号などのホッチキスも手掛けるようになり、品揃えが進みました。

3号ホッチキスはその後も改良されましたが、クロームメッキのデザインは当時のままで、卓上型のスタンダードタイプとして、現在でもロングセラーを続けております。



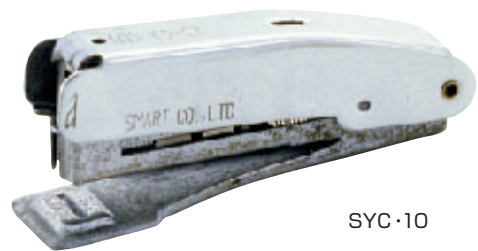
ヤマコースマート

### 2. SYC・10の誕生

「ホッチキス」の名称を一般的にしたのは、なんといっても昭和27年7月に発売した小型ホッチキスSYC・10(シック・10)です。「綴じるだけの機能に徹し、部品点数を最小限にし、低コストに抑える」というのがこの製品の開発ポイントでした。

それまでのホッチキスは紙綴器などとも呼ばれ、オフィスの部や課で購入するといった事業所向けの用度品でしたから、形は卓上型で大きく重量もあるものでした。

ところがSYC・10は、部品点数は8点と少なく小型・軽量で、指先の力で綴じることができます。操作もいたって簡単で、耐久力もあり、価格は200円と画期的なものでした。オフィスから学生・家庭へと急速に普及し、数年の内にホッチキスはひとり1台が常識の文房具になりました。



SYC・10

### 3. MAX・10の改良

昭和27年に発売された小型ホッチキスSYC・10は、社名の変更にともない昭和29年には「MAX・10」と名称が変わりました。以降、MAX・10が普及するに従い「マックス」とホッチキスは同義語になり、文房具店には「マックスください」とホッチキスを買いに來る人が多くなりました。

SYC・10は、MAX・10、HD-10（昭和48年）と名称は変化しましたが、基本性能は変えずに、使い勝手の向上に工夫を重ねてきました。

昭和28年に指の安定を良くし加工性を良くするために、現在のホッチキスの原型である角型のデザインが採用され、昭和31年にはハンドルの先端にポリエチレンの五角形の半透明ヘッドが付けられました。昭和34年にはヘッドの材質をセルロースアセテート（現在はABS樹脂）にし、指当たりがさらに良くなるよう上下に取り付けられました。リムーバも初めて備わるなど、各所に工夫が施されました。

昭和39年には作業性を増すために、フレームの開きを七ミリから10ミリへ広げました。また、昭和42年ホッチキスで初めて日本工業規格品に認定され、JISマークが表示されました。

昭和40年代は多くの用途に応えるため、製品の種類が増えましたが、100本の針が一度に装填でき、耐久力を約五倍も向上させた、画期的なHD-10JAが生まれました。

価格は発売以来、コストダウンをはかり、200円、180円、150円、120円へと値下げし、昭和34年に定価を100円にしました。100円の定価は昭和45年まで11年間も続きました。

SYC・10に始まる小型ホッチキスのHD-10は、名実共に日本のホッチキスのスタンダードとなり、昭和52年には累積販売台数は一億台を突破し、平成2年に2億台、平成11年には3億台に達しました。（平成20年 3億9千万台）

現在、10号ホッチキスの国内シェアは約75%、年間に1千万台を生産しており、世界中のオフィスや家庭で愛用されています。

